
銀の袂魔師

冬瀬志保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の被魔師

【Nコード】

N5002Y

【作者名】

冬瀬志保

【あらすじ】

メフィスト・フェレス卿の意図により、「青の被魔師」の世界へと飛ばされてしまった万事屋三人組。

彼らは、被魔塾に通い、被魔訓練生になることを余儀なくされてしまった。

そこに現れたのは、真選組の面子にその他レギュラーメンバー。しかも銀時はなんと本当に「銀の被魔師」になっていて……！？

そして、彼ら「異世界の住人」を召喚したことにより、ヴァチカン

本部をさまざまな思惑が飛び交う。

「銀魂」メンバーが「青の祓魔師」の世界で悪魔を祓って大暴れ！
その結末やいかに！？

序奏 ことの始まり（前書き）

初のコラボ作品です。

「銀の被魔師 SILVER EXORCIST」、楽しんでいただけたら幸いです。

序奏 二つの始まり

「どこだよ、ここ……」

目の前に聳えるのは、積み木のように建物が「積んである」、大きな丘である。いや、もはや丘といってもいい大きさなのであろうか。鉄橋の上を電車が走り、足元には運河が流れ、高い塔からは煙がぼつぼつと立ち上る。それ一つだけで一つの城砦のよう。見てみると、その「気迫」のせいで気押される思いがした。

「……今まで何してたっけ、俺ら」

彼がぼつりと呟いた、素朴で本来なら阿呆らしいが、今の状況では適切な疑問。

彼、とは、白い着物を着流し、黒いブーツを履いて、同じく黒のシャツとズボンを身につけた銀髪の男のことである。

その隣には、黒髪にメガネ、白の着物と青い袴を着ている少年、それから、髪を両側でぼんぼりにした、赤い中華服に身を包んでいる少女がいた。

今、その三人組が立っている場所は、巨大な丘と繋がっている橋の上。車が彼らの横を高速で通っては過ぎ去っていく。

「なあ、新八」銀髪の男が、拍子ぬけした声で、メガネの少年に質問を投げかけた。「……ここ、どこ？」

それに対して、新八と呼ばれた少年は、丘から目を離さずにそっ

けなく返す。

「僕が知ってる訳ないでしょ。」

「だよな」と銀髪。

「そうです」とメガネ。

しばらく無言の間が続く。が、少年がその沈黙を破った。

「……でも、一つ言えることがあります。ここ、絶対かぶき町じゃないです。それどころか、地球でもない気が」

「それくらい、私にもわかるネ。たぶんコレ、世に言う『コラボ』とか『クロスオーバー』の類の始まりアル」と少女が淡々と付け加える。

それから少し後まで、茫然と立ったまま、彼ら万事屋三人組と坂田銀時、志村新八、神楽は、自分たちが今どこにいるのかわからず、放心していた。

ことの始まりは、つい五分ほど前にさかのぼる。

江戸はかぶき町、万事屋の時計の針は、朝の七時半を指していた。

万事屋のオーナー・坂田銀時、そして従業員の少女・神楽は、メガネ雑用係・志村新八が来るのを、いつもどおり、ぐうたらしながら待っていた。

しかしながら、出勤時間である七時を回ってすでに三十分も経っているというのに、いっこうに新八は姿を現さない。万事屋のペットである巨大犬・定春でさえ、暇そうに大きな欠伸をかいていた。

「……おっせーな、新八。何やってんだか、ツッコミメガネのくせに」

銀時は、読んでいたジャンプから死んだ目を離し、ぼそりと呟く。

その時、

「遅れてすいませーん」

誰かがガラリという音と共に、万事屋に足を踏み入れた。

「いやあ実は、姉上が帰ってこなくて……。朝帰りとかじゃないといいんですけど」

ブツブツと心配そうな声音でそう言いながら、その誰か　もと　い新八は万事屋の廊下を歩き、応接間の引き戸に手をかける。

「もし、今日依頼がないんだったら、一緒に姉上探してほし……」

と、新八が応接間の戸を開いた瞬間、部屋の中央から、突如、閃光が走った。

途端、今まで見ていたものが、何も見えない真っ白い世界に変わり、すさまじい突風が三人の身体を持ち上げようとした。

あまりの眩しさに、神楽と新八は服の裾で目を隠すが、一人、銀時だけが、何が起きたのか分からず、デスクに足を乗つけたまま、あんどりと口を開けている。

「え……。何口……」

銀時の独り言が終わる前に、いつの間にか彼を含んだ万事屋三人組は、かぶき町からあとかたもなく姿を消していた。

これが、三人が今に至る過程である。

三人全員が万事屋に集まった刹那、彼らは異世界へと飛ばされた。

ひょんなことにもそこは、悪魔や悪霊を祓うのを生業とする者た

ちが住む街・正十字学園町。

が、彼らがこの街へと飛ばされたのは、単なる偶然ではなく、正十字騎士團日本支部長、名誉騎士・メフィスト・フェレスの思惑であるとは、誰も知る由がない。

そう、闇に潜む、悪魔以外は

序奏 二つの始まり（後書き）

初めてのコラボ作品なので、至らない点多いとは思いますが、一杯頑張ろうと思います

第一話 被魔師たちの街

被魔師、というのは、文字通り悪「魔」を「被」う「師」ものたちのことである。

それ相応の技術を持ち、地域などで異なるが、ある程度共通した手段で悪魔と対抗し、人々を救うのが生業だ。

日本の正十字学園は、そんな被魔師を育てるための学業施設である。「通常授業」には「普通」の生徒たちが集い、「塾」の方に「被魔訓練生」、または「候補生」エクスライアが被魔を学びに来る。

これは、とある人物の思惑により、そんな「被魔」の世界にもぐりこんでしまった異世界の住人と、被魔塾の生徒たちの物語。

「“地の王”の眷属で、王等を中心にコロニーなどを築く、小動物に憑依する悪魔は？ ……奥村！」

名前を呼ばれて、目を開けたまま夢の世界に浸っていた少年が、ガバリと間の抜けた顔を上げた。

「…………え？」

「だから、“地の王”の眷属で、小動物に憑依する悪魔は何だ？」

教科書らしき冊子を手には、こちらをギリリと睨めつけてくる講師に、少年は、「えーと……………」と宙を見上げながら、頭をフル回転させる。

「あ、そうだ。アレだろ…………」。ゴブレット！

自信満々の返答に、講師のみならず、隣にいた男子生徒までが彼をいるような視線で見つめた。

「あり…………。間違ってた…………？」

「奥村…………。授業を聞いていないだろう…………！」

必死で抑えているようだが、教師の顔には、明らかに怒りの色が浮かんでいる。

「あ、いや、すみません」

実技の時だけはいつも起きていたのだが、やはりこう、長い授業が始まると、どうしても半分寝ている状態に陥ってしまう。

「ゴブレットじゃない、鬼だ！最初の授業の時に暴走していたあの悪魔！覚えてないのか！？」

叫んでいる教師の声さえ、少年にとっては子守唄のようなものだ。

「あ、あー……。覚えてないです」

眠りに誘おうとする重たい瞼をなんとか押し戻して、半目のまま少年は答える。

教師の頬が、見る間に真っ赤に染まっていくが、少年は意にも介さない。

講師の怒りが爆発する寸前まで、あと五秒……。

四……。

三……。

二……。

一……。

「おーくむ……」

「失礼、ちよつとよろしいですかな？」

しかし、教師が声を荒げる前に、教室の扉が開いた。少年を含めた九人の年若い生徒たちは、そちらへ自然と目を向ける。

「あと少して授業も終わると思いますが、今日はぜひ、スペシャル・ゲ特別な招待客ストを紹介したくてね」

扉の前に立っているのは、何とも奇抜な格好をした男と、一人の

少年。

少年は、法衣カソックと学生服を合わせたような衣服を身に着け、腰には、何丁かの拳銃と銃弾を挟んだ太い革製のベルトを巻いている。顔は、少年というにはあまりにも大人びていて、或いは青年あると呼んだ方が適格なのかもしれない。

男の方は純白のマントとスーツをまとい、十九世紀の貴族の婦人が持つ傘に似たものを手に持っている。首元からは、パープルとピンクとも言えない色のスカーフがのぞいていた。男の被ったシルクハットは、大道芸の道化師を連想させ、服装とミスマツチしているからだろうか、怪しげな雰囲気醸し出す。年も、外見だけでは判断がつかない。年若くも見えるし、数十年の時の流れを生きた老人のようでもある。

「理事長……」

生徒と講師が、なんとなく場違いな印象の男を、軽い驚愕のこもった瞳で見つめた。

男は、一つウィンクをすると、生徒たちに向かって語り出す。

「今日から、新たな被魔訓練生ベイジが数人、増えます」

いきなりそう告げた男に、生徒のみならず教師までもが目をむいた。唯一冷静でいるのは、言いだした当の本人の男と、その後ろに控える少年だけ。

「あの、理事長」

生徒のうち一人が、席から立ち上がって、手を上げながら男の言葉を遮った。

「増えるって、どういうことですか。塾を途中からやめるのはいいとして、入るのは……」

「ご心配なく。才能があるかどうかは未だ判断が付きませんが、彼らが何と言おうと、是が非でも講義に付いていけるようにするつもりですから」

そんな言葉に首を傾げる生徒たちに、男はもう一度片目をつぶった。

「兎に角、今はついてきてください」

ところ変わって再び橋の上。

すでにここに来てから二十分経過するが、万事屋三人組は、口は動かすものの微動だにしない。

「これからどうすればいいのかな、俺達」

「……さあ」

「大丈夫ネ。きつとルイ的なカッケー気持ちのいいヒーローが迎えに来てくれるネ。銀ちゃんとは大違いの」

「『銀ちゃんと大違い』ってのは必要ないよ？ 神楽ちゃん」

軽いツッコミを入れた後に、銀時は「はあ」と腰に手を当てる。

「ホント、このままじゃ何もできねーよ。金も何もないんだから」

と、その時、そんな銀時を見つめて、新八の表情が、不安から疑問の色へと変わった。

「……銀さん、洞爺湖、どこに置いたんですか」

神楽も、銀時の腰を覗いて、およ、という顔になる。

銀時は今一度淡い吐息を漏らし、

「んなもん部屋ん中まで腰に差してねーよ。……ま、今は持ってたから、って後悔しているけど」

肩を落とした。

「
アインス ツヴァイ ドライ
1、 2、 3」

不意に後ろから声がして、二十分ぶりに銀時らは身体を動かした。背後に立っていたのは、奇妙な格好の男と、法衣カソックを纏った数人の男

たち。それから、学生服を身につけた少年少女だった。

もっこりと膨らんだ形の傘を手にした男が、もう片方の手に握っていた木刀を、銀時に向って差し出す。

「お前は……」

男は目を細めてニヤリと微笑んだ。

「お探し物は、これですか？」

銀時は、戸惑いながらもそれを受けとって、何とも言えない微妙な顔をした。

確かにそれは、彼がいつも持っている木刀だった。しかし、今は、鎖でぐるぐるに巻かれ、得物としては使えなくなっている。

「……なんだ、コレ」

率直な感想をそのまま口に出すと、男はニヤリと笑った。

「魔剣です」

「ま……けん……？」

眉をひそめながら訝しげに呟く銀時に、男は優美な動きで礼をした。

「この正十字学園の理事長をしているメフィスト・フェレスと申します。詳しい話はまた後で。今はまず、当学園までお越し願いたい」

第一話 被魔師たちの街（後書き）

あの……。

なんともバカげた質問なんですが、正十字学園町の住民は、みな被魔師の塾があるということを知っているのでしょうか？
ご存じの方、教えていただければ幸いです。>>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5002y/>

銀の祓魔師

2011年12月29日17時46分発行